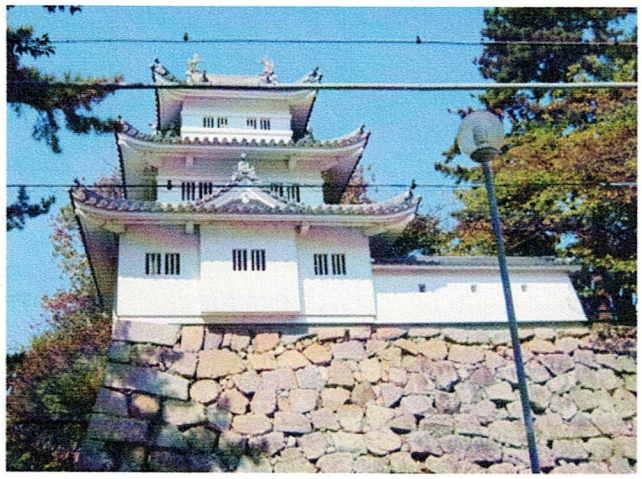
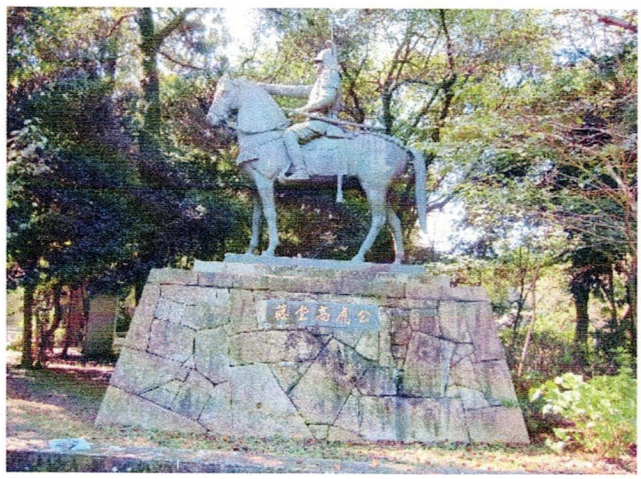
藤堂高虎公の生涯

一　初めに

令和六年度第二回バス研修会「津城跡等に参加して」、津城（安濃津）の歴史を知ることができた。

一六〇八年（慶長十三）に藤堂高虎は、徳川秀忠から伊賀、伊勢に加増移封され、二十二万石の津藩主となる。その後、一六一一年（慶長十六）に高虎は石垣をより高くし、三重の櫓を作るなど、津城の大規模な改修を始めた。さらに高虎は改修だけにとどまらず、町人のために町内の整備、武家屋敷の整備も進めた。津城の歴史の中で高虎の存在が大きく関わっていたことを知った。この機会に、何度も主君を変えた武将と伝わり、城造りの名人としても知られている藤堂高虎は一体どんな生涯を歩んだか、調べたくなり原稿にする。





写真は津城跡にある櫓と藤堂高虎の像

二　藤堂高虎の年譜

弘治　二年　（一五五六）正月六日、藤堂家の次男として、近江国犬上郡藤堂村にて誕生。幼名「与吉」。

元亀　元年　（一五七〇）浅井長政に仕え姉川の合戦に初陣。

元亀　三年　（一五七二）浅井家を去り、阿閉淡路守貞征に仕える。

天正　元年（一五七三）阿閉家を去り、放浪の末に磯野丹波守員昌に仕える。

天正三年（一五七五）磯野家を出奔し、近江国大溝城主・織田信澄に仕え八十石を与えられる。

天正　四年（一五七六）織田家を出奔し、羽柴小一郎秀長に三百石で仕える。「与右衛門」と改名。

天正　九年（一五八一）但馬国一向一揆を平定し三千石加増。一色修理太夫義直の娘久芳夫人と婚姻。

天正　十年（一五八二）山崎の戦で、羽柴秀長の元で天王山に布陣。

天正十一年（一五八三）賤ケ岳の戦功により秀吉から一千石、秀長から三百石加増され四千六百石に。

天正十三年（一五八五）秀長に従い紀州征伐。四国の長宗我部氏を攻め、秀吉が四国を平定。五千四百石加増。一万石になり紀州粉河を与えられる。和歌山城の築城の際、普請奉行になる。この頃から高虎と名乗る。

天正十四年（一五八六）秀長の命により、京都聚楽第に徳川家康の邸宅を造営。

天正十五年（一五八七）秀吉の九州征伐に従軍し薩摩軍を破る。正五位下佐渡守に任命され、一万石加増される。紀州粉河城主二万石の大名。

天正十六年（一五八八）この頃、紀州一揆の残党征伐として高虎が赤木城を築く。

天正十九年（一五九一）主君秀長が五十一歳で死去。秀長の養子の秀

保が家督を相続したため、補佐役。
文禄　元年（一五九二）朝鮮出兵（文禄の役）のため秀保に従軍。
文禄　四年（一五九五）主君秀保が十七歳で死去。高野山に隠遁。秀吉の説得を受け下山。伊予国宇和島七万石を与えられる。翌年、宇和島城の大規模改築。
慶長　二年（一五九七）再び朝鮮出兵（慶長の役）、高虎は水軍の将を命じられる。帰国後、大洲城の大改修。
慶長　三年（一五九八）蔚山（うるさん）城で加藤清正、浅野幸長を救う。蔚山をはじめ其の外に諸城を普請。八月秀吉死去。高虎、総引き上げの大任を果たす。一万石加増で八万石となり伊予国大洲城主に。
慶長　四年（一五九九）石田三成等の策謀で、大坂邸で徳川家康を守る。松寿夫人を側室とする。
慶長　五年（一六〇〇）関ケ原の合戦、東軍に加担して勝利を収める。大和郡山城請取の命を受ける。戦功により十二万石の加増。伊予半国に二十万石を領す。
慶長　六年（一六〇一）膳所城の縄張りを命じられる。高虎と側室松寿夫人との間に嫡子大助（後の高次）が誕生。
慶長　七年（一六〇二）家康から伏見城修復工事を命じられる。この年より今治城の築城開始。
慶長十一年（一六〇六）江戸城の縄張りを設計した褒美として、二万石加増され、二十二万石に。
慶長十二年（一六〇七）佐渡守を改め、和泉守を称す。
慶長十三年（一六〇八）伊予今治より伊賀・伊勢へ転封。伊賀国、伊勢国安濃郡・一志郡内、伊予国越智（おち）郡内（丹羽長秀の三男で、藤堂高虎の養子高吉支配）の計二十二万三千九百五十石の石高となる。九月、伊賀上野に入城。十月、津に入城。
慶長十四年（一六〇九）丹波篠山城の縄張りを命じられる。
慶長十五年（一六一〇）丹波亀山城に、今治城の天守閣を移築造立。
慶長十六年（一六一一）正月より上野城・津城の大改修開始。
慶長十七年（一六一二）九月二日、建設中の上野城天守閣が大暴風雨により倒壊。その後は再建されず。
慶長十九年（一六一四）江戸改修を命じられる。大坂冬の陣に従軍。
慶長二十年（一六一五）大坂夏の陣。八尾で木村重成・長宗我部盛親軍と激突これを破る。藤堂軍も冬の陣の六名を合わせて七十一名の犠牲者を出す。五万石の加増で二十七万三千九百五十石の大名に。
元和　二年（一六一六）家康死去。日光東照宮造営、縄張りを担当。
元和　三年（一六一七）秀忠より、伊勢田丸城五万石加増され、三十二万三千九百五十石となり、津藩の石高確定。
元和　五年（一六一九）秀忠より、二条城改修のための縄張りを命じられる。田丸城五万石を大和国四郡・山城国一郡と交換する。
元和　六年（一六二〇）大坂城改築、縄張りを担当。秀忠娘和子（まさこ・東福門院）の入内に働き、実現する。
元和　七年（一六二一）二条城再改修、縄張りを命じられる。
元和　九年（一六二三）家光、三代将軍に。大坂城南曲輪石垣築造。眼病を患い不治の病に。
寛永　三年（一六二六）上野寛永寺造営。左近衛権少将に任じられる。これより伊賀少将と称す。
寛永　四年（一六二七）寛永寺に上野東照宮を造営。
寛永　五年（一六二八）上野寛永寺に寒松院を建立。京都南禅寺楼門を建立寄進。
寛永　六年（一六二九）大坂城再建の縄張りをする。
寛永　七年（一六三〇）十月五日、江戸の柳原邸で死去。享年七十五歳、寒松院に葬る。
法号「寒松院殿前紀州羽林道賢高山権大僧都」

高虎公座像　前田呉耕模写画（伊賀上野城蔵）

写真は参考文献①から借用

三　主君の変遷

現代を生きる人々は次々に職場（会社）を変えるのが当たり前の世の中だが、戦国時代にもそうした武将は数多くいた。そのうちの代表的な存在が藤堂高虎であろう。高虎は、何度も主君を変えたことで日和見的な武将のように言われるが、最近は別の見方をされるようになってきた。高虎が見限った主君たちは、実は次々に滅びたり死亡したりしていることを見ると、高虎が若い頃からしっかりした「人物鑑定眼」を備えていたことが分かる。言い方を変えればこうした事実は、高虎には主君として仕える相手を見定める力があったことの証拠でもあろう。

高虎は、十四歳で浅井長政に仕え姉川合戦にも参戦したのが最初で、以後は阿閉貞征・磯野員昌・織田信澄・羽柴秀長・秀保、さらに豊臣秀吉・秀頼を経て、最後は徳川三代の家康・秀忠・家光に仕えた。このように主君を次々と変えて生き抜いた高虎は、陰では「戦国の風見鶏」などという不名誉な言われ方をされていた。

しかし高虎は、仕えた主君には徹底的に尽くした家臣である。戦国時代、徹底的に尽くすとは、口先で上手なことを言うのではなく、身を粉にして戦場を暴れ回ることを言う。そうした戦場働きを嫌がらずに高虎は、弓矢、槍ふすま、鉄砲の最中を走り回り、戦い抜いていた。高虎は背が高く、身長一九〇センチの大男だったというのが定説です。

こんな話が遺されている。藤堂家が三十二万三千石という石高になった時に高虎は、素っ裸になって数人の家臣に手足の指から耳の裏まで、身体の疵（きず）がいくつあるかくわしく数えさせた。すると家臣が見たのは、肌に隙間がないほどの疵で埋まっている高虎の裸体であった。鉄砲の弾跡・槍の突き傷、刀疵、すべてが戦場における疵であり、さらに家臣たちを驚かせたのは、右手の薬指と小指が千切れて失われていたことであり、どの指にも爪がなかったし、左手の中指は一寸ほど短くなっていたことだった。さらに左足の指にも爪は一本も残っていなかったのである。

四　補足

一　津城のボランティアガイドの説明中で、「高虎の築城は安くて・早くて・攻めにくい」と、「高虎の縄張りは二つ準備をして、一つに粗悪なものを、他に守りを強固にしたもので、主君にどちらかを選んで貰う方法を取っている」と言われたのが印象に残っている。

二　一六一六(元和二)、高虎は、家康の最期に外様の中でただひとり、

立会いを許された。家康が他界する十日前に高虎を呼び「世話になったが来世でも大御所様に仕える積りです。私は日蓮宗ですが、大御所様の宗旨である天台宗に改宗しますので来世もお仕えする事ができます」と涙ながら答えたという。高虎は即座に天海僧正のもとで天台宗に改宗した。「死後は天海と高虎と共に眠りたい」と家康の遺言通り日光東照宮には、家康、高虎、天海僧正の三人の像が祀られている。

三　家康は、悲願であった孫娘を天皇に嫁がせることを大坂の陣の前に朝廷へ申し入れ、決定していたが、大坂の陣などのため延期になったまま悲願を果たせず没した。それは二代将軍秀忠の五女・和子（まさこ）の後水尾天皇への入内問題である。しかし、天皇には他の女性との間に子が生まれ、天皇自身が和子入内に難色をしめすなど停滞が続いた。そこで高虎が局面を打開の露払い役を務めることになった。宮中の反対派公家の前で「入内ならぬ場合は、御所で切腹する」と強引に押し切り、一六二〇年（元和六）に和子の入内が実現した。徳川家と朝廷との結び付きを強める政策で高虎が責任者の立場にあったのは、将軍の側近中の側近と認識されていたと考えられる。

和子は入内から四年後に中宮となる。その後、二男四女を設け、天皇とともに修学院離宮を造営した。武家の娘が天皇に嫁いだのは平清盛の娘徳子（建礼門院）が高倉天皇に嫁いで以来である。

四　一六二一年（元和七）に二代将軍秀忠から二条城の改修の縄張りを命じられた。その際、一つは渾身の作、一つは手抜きした作と二つの設計図を用意し娘婿の小堀遠州らに示した上で秀忠に選んで貰った。決めてもらったのはもちろん渾身の作が選ばれたが、高虎は、「二つうちから決めていただくことで、秀忠公の決めた設計図。ということになる。一つだけでは自分（高虎）の設計図となる。主君の仕事となるようにするのが家臣の務めだ」と説いたという。

五　『出世の白餅』・・・講談の高虎

【解説】　高虎は出世物語として『出世の白餅』『出世高虎』『意地っ張り五千石』などの演題で講談にも登場する。

【あらすじ】近江国の藤堂村の源助の倅で与左衛門は十六歳のとき父親は亡くなり、村を出る。摂津国尼崎の小さな大名家で足軽になり、孫作という者と兄弟同様の仲になる。二人で主奔するが、すぐに無一文になった。伊勢国四日市で本陣森田屋に泊まる。二人は玄関先の祝い用の餅を食べたいと言い出し、宿の主は白餅を桝に盛って二人に与えた。これには「桝桝（ますます）御出世、末は白餅（城持ち）」の意味があると説明。翌朝、二人が無一文であることを聞いた宿の主は「御出世の暁にはお支払いください」と言い、さたに永楽銭五貫文を差し出した。

十数年の後、高虎は秀吉の目に留まり、伊予今治八万石の城主になった。孫作は京極家に仕え家老上席三千石取りとなる。あるとき、久々に二人は対面した。孫作はかって松島で約束したとり、高虎の馬の轡（くつわ）を取ると言う。頑固に言い張る孫作に困った高虎は、彼を戦いのときには馬の轡を取る別当にし、戦いでない平時は特別手当として五千石を取らせるということで決着した。

高虎はその後、伊勢津・伊賀上野三十二万四千石の城主に出世する。かつて孫作と共に世話になった四日市の宿屋の主には百両の金子と餅米二百俵を渡した。

また別の伝承では・・・

藤堂高虎が足軽のころ主君のもとを飛び出し、放浪中、三河国吉田宿（現在の愛知県豊橋市）へ差しかかったとき街道沿いに餅屋を見つけ、あまりの空腹に銭がないのに餅を注文し、ぺろりと平らげた。食べ終わってから、高虎は店の主人に無銭飲食であることを正直に白状して詫びた。

ところが店主は、「自慢の白餅をこれ程見事に召し上がられとは餅屋冥利に尽きます」と、無銭飲食をとがめるどころか餅代どころか道中の路銀まで恵んでくれた。支払は出世してからでよいと言って許した。これに感激した高虎は、礼を言って立ち去った。数年の後、参勤交代の途中大名行列を止め、年老いた主人中西与左衛門に礼を述べて餅を

家臣に振る舞ったという。

餅屋の恩を忘れないため高虎は、『白餅』を『城持ち』にかけて、『三つ丸餅』を藤堂家の旗指物とした。紺地に丸餅は『城持ち』に、黒地に丸餅は、『石持ち』に通じる縁起を担いでいるという。

この話は、家老中川蔵人の日記に、「藩祖高山公ゆかり、三河吉田屋中西与左衛門方にて餅を喰うは習し也」とあるのが根拠としている。

写真は関ケ原中学校内にある藤堂高虎の旗指物

注意　しかし、全てが史実というわけでもないようだ。それでも、当時の家老の日記に残されている以上、全てが創作というわけでもないだろう。日記には「高山様（高虎）が召し上がられた頃より」とも記されており、史実と創作が交錯するところに、この話の魅力がある。

五　終わりに

関ケ原合戦前は豊臣家に仕えていた大名である藤堂高虎は、合戦後徳川家康に接近して以降徳川の重臣になる。また、家康・秀忠から厚い信頼を得て、伊勢国の戦略的要地を任され名門大名家の地位となる。さらに、伊勢の国作りでは、家臣の育成や藩の基盤づくりに政治的手腕を発揮した。

藤堂高虎の生涯を調べて感じたことは、「実利的で柔軟な思考を持ち合わせた人物。幼いころから体格に恵まれ、並外れた強さを誇り、負傷しても弱音を言わない強靭の持ち主。徳川家康の信頼を得た高虎は、家康が亡くなる際にはその願いを汲み、天台宗に改宗。誠実かつ思慮深い一面を持ち合わせて、時代の流れの中で生きた武将」であると。

また、高い築城技術を身に着けていた高虎が主君（家康）から絶大なる信頼を得ていたことや、さらに「高虎公遺訓二百ケ条」を読む中で、「現代でも職場の上司、普段から周りの人からの信頼や信用がいかに大切であるか」と、再確認できた。

追記

・藤堂高虎の年譜は参考文献①を底本に参考文献②、③と校合した。

・藤堂高虎の携わった築城や改築は開始年を記した。

六　参考文献

① 高虎公遺訓二百ケ条　公益財団法人伊賀文化産業協会

② ウィキペディア（フリー百科事典）

③ 各お城の公式サイト（行政や観光協会）

④ 登城した際に配布されたパンフレット